

僕の色から見たこと

長野県 学校法人松商学園松本秀峰中等教育学校 2年

木山沢 奏斗（きやまざわ そうと）

私には先天性の色覚異常があります。「色覚」とは色を識別する感覚のことで、そこに異常が生じています。例えば赤と緑、緑と茶、オレンジと黄緑など区別のつきにくい色があります。そしてそのことで見え方が正常な人と少し違うということが色覚異常です。先天性の場合は原因が遺伝的なものなので現時点では有効な治療法はありません。けれど先天性の色覚異常は日本人男性の5%、女性の0.2%の頻度で起きていて男性では20人に一人とされています。私が色覚異常だとわかったのは小学二年生の時でした。

「奏斗の龍だけ違うよ。」

ポツリと友達が言いました。それはクラスで龍の子太郎の物語から自分の好きな場面を描いてみよう、という図工の授業をして、出来上がった作品を先生が廊下に飾り終えた時のことでした。私には友達の言っている意味が理解できませんでした。廊下にならんだみんなの絵は様々な表情のそれぞれの龍の子太郎と母龍でどれ一つとして同じ龍ではなかったからです。

「どこがちがうの？」

と、とっさに理由を聞けなかった私はこの日の出来事を母に話しました。数日後参観日があり、母が見つけてくれました。

「この前言っていた龍の子太郎、みんなの龍は緑色をしてたけど奏斗の龍は茶色だったからかもしれない。」

色覚異常とわかった時、眼科の先生は

「心配いらないよ。みんなと少し見え方がちがうだけだよ。」

とやさしくおっしゃいました。けれど私は

「みんなと見え方がちがうってみんなはどう見えるんだろう。」

と心の中がもやもやして気になって仕方ありませんでした。きっと私は「みんなと違う」ということが不安で怖かったからなのだろうと思います。もしかしたらいじめられるかもしれないと思っていたのかもしれないかもしれません。そんな時、父が

「みんなと違っていいじゃないか。奏斗はみんなの見えない色が見えるようになるかもしれないぞ。」

と言ってくれました。私はこの言葉に何か特別なものが見えるようになる気がして少し心が救われました。

あれから六年が経ちます。眼科の先生が言われたように時々、色に迷うことが

あっても生活そのものに何も不便はありません。けれど私はこのハンディキャップを通じて、自分が思っている以上に他人を気にしている弱い自分と向き合うことができました。最初は友達がどの絵の具を選んでいるかを確認してから自分もその色を選んでいました。でもだんだん自分から

「これ何色？」

と聞けるようになり、そのうちに

「いや。自分の見たままを塗ろう。」

という気持ちに変わっていったのです。少しずつですが私は自分自身を受け入れることができたのだと思います。父は

「見えない色が見えるようになる。」

と言いました。それは

「違いのある一人一人の人間を認められるようになれ。」

と伝えたかったのかもしれませんが。世の中には人種、性別、障害などの様々な違いに差別されることがあります。けれどそもそも人間は誰一人として同じではありません。私は胸をはりありのままの自分で生きていきたいと思います。そして相手のありのままもよく知って、受け入れていきたいと思います。人権を尊重するということはお互いのありのままを認め合うことではないでしょうか。まずは身近な友達の中に信頼関係を築いていくことから始めていきたいと思います。